

年頭のご挨拶

一歳の計は陽春にあり

公益社団法人 全国行政相談委員連合協議会 会長

小野 勝久



行政相談委員の皆さまはじめ関

係の皆さまにはお健やかに新年を

お迎えのこととお慶び申し上げます。

す。昨年は、全国行政相談委員連

合協議会の諸事業の推進に当たり

大変お世話になりました。誠にあ

りがとうございました。本年も相

変わらずご理解とご支援を賜りま

すようお願い申し上げます。

江戸時代中期に、水戸藩・地理

学者で日本地図の先駆者と言われ

る「長久保赤水」の人生訓に次の

ようなものがあります。

一日の計は鶏鳴けいめいにあり。鶏鳴に起

きざれば暮に及んで悔くゆ。

一月の計は朔旦さくたんにあり。朔旦に礼

せざれば敬義に悔ゆ。

一歳の計は陽春にあり。陽春に耕

さざれば秋後に悔ゆ。

一生の計は幼年いっしょうにあり。幼年に学

ばざれば老に至って悔ゆ。

これは昨年秋、茨城地相協県北

支部の自主研修会が高萩市で開催

された折、今から約250年前、

伊能忠敬の日本地図より40年前、

独学で、葉売りの商人や修験者か

らの情報などをもとに「改正日本

輿地路程全図」を完成させた長久

保赤水資料館を訪ねた時、目に

入った赤水の言葉です。何事も初

めにしっかりと勉強することの大切

さと絶えず勉強することの重要性

を訴えています。

今年は、委嘱替えの年に当たり

ますが、多くの行政相談委員の皆

さまは、継続していただけるもの

とっています。2年前に、行政相談委員を委嘱された委員の皆さまには、コロナ感染防止という大義のため、思うような活動が出来ず、行政相談委員としてのやりがいや喜びを体験する機会を奪われてきたことと思います。あるいは、モチベーションの維持に心碎かれた行政相談委員も多かったと思います。対面相談が中心の活動にあつて、非対面や遠隔による行政相談はどのような方法があるのか、新任委員ばかりでなく全国多くの行政相談委員は模索していたかと思っています。

先に述べた赤水の「一歳の計」と私が考えていたことが同じであると分かりました。農業では、春に肥料を施し土中に酸素を含ませ畑を耕し、しっかりと土づくりをすることによって、秋には実も

たわわな収穫が出来る、との訓えであり、基礎、基本の大切を言っていると思います。私は、行政相談活動が出来ないなら、出来ることを探し無理のない範囲で活動しようと考え、自己研鑽には絶好のチャンスと捉えることに気持ちを切り替え、自分を耕すことにしました。何も出来ないとなると、不思議なもので自分を見つめるようになります。今後も社会生活の多様化が進み、行政に対する意見や要望が複雑化し、多岐にわたるようになり行政相談委員の使命と役割はますます重要になってくるものと思われることから、相談者に向き合うにはまず自分を磨こうと考えたのです。

そこで、たくさんある行政相談に関する書籍を手にし、再度丁寧に読み直すことにしました。

まず、「季刊行政相談」です。平成の古いものから令和の最近のものまで、貴重な参考資料になる機関誌だと思いました。年間4冊として私の在任期間30年で延べ120冊になります。全てが保存されてはいませんが、大部分は残っています。その中で、第90号(平成13年8月発行)の行政相談委員制度40周年記念特集号における片山虎之助総務大臣の式辞や小泉純一郎内閣総理大臣の祝辞など懐かしい思いで読み返しました。特に印象に残ったのは、第106号(平成17年8月発行)の「私のサービス考」と題した谷昇元全相協会長の「相談委員の皆様が心で考え、心で語り、心で動く、こうした姿を見た時、正にサービス人間そのものである。私はこのような素晴らしい人たちの仲間に入れていた

だき、」の言葉です。

また、「知っておきたい！ 委員活動のあゆみと今後の展望」（令和元年8月発行）と「行政相談委員のひろば（十訂版）」（令和4年2月発行）を改めて読み、行政相談委員は何する人？ 行政相談委員制度を知らなかった、など2年ごとに行われる委嘱替えに当たって、新たに委嘱された方々のためにも参考になる本です。自分が委嘱された時と比較しながら読みました。私からお勧めする全相協発行の本です。

「行政相談事例集」（平成25年発行）や「行政苦情救済推進会議のあゆみと成果」（第100回開催記念、平成27年12月発行）などから、過去のたくさんの方の改善事例を読むと、今まで行政相談委員の果たしてきた功績のすごさをひしひ

しと感じ感銘深くしたのと同時に勇気をいただきました。

各地相協の機関誌も楽しく読ませていただきました。奈良の「鹿笛」第100号記念誌、大阪の地相協創設50周年「あし」創刊第30号、60周年記念誌としての、東京の「むさし」第73号、埼玉の「さきたま」第54号、栃木の「栃の実」第137号、群馬の「かみつけ」第80号、茨城の「茨城」第101号やその他の地相協の機関誌などです。各地相協それぞれ地域の香りが漂い、私にとって参考になる記事もあり、各誌とも登場人物の記事、内容に興味を引くものがたくさんありました。その中で、特に印象に残った一つは、「むさし」第73号の総務省行政苦情救済会議の前座長の松尾邦弘さんの特別インタビューの記事でした。一部引

用すると、「行政の問題には古くからお上意識ということがある。他方、国民もそれを受け入れている場合がある。折に触れてそれではだめだと伝えるべきではないかと思う」との言葉でした。行政苦情の根底にはそのお上意識が流れている、その根底を行政相談が指摘すべきとの言葉を私は真摯に受け止めました。同じ思いをさしている行政相談委員もいらっしゃるのではと思うのです。

新型コロナウイルス感染症という世界的な流行によって、世界も日本も社会生活が大きく様変わりしました。これからの生活もウィズコロナ時代と言われ、感染対策をしながらの生活になるものと思われまます。行政相談活動に当たって、全国の行政相談委員は、活動出来ない時どう過したか、それぞ

れ考えもあつての活動期間であつたと思います。私は自己研鑽にシフトしたという一事例として紹介させていただきますました。皆さまのコロナ禍での過ごし方も是非ご紹介いただき、全国5,000人の参考にさせていただければ幸いです。

